

大阪大谷大学

平成三十年度 入学試験問題（一般入試 後期）

国 語

注意事項

- 一 設問は三題あります。そのうちの二題を選んで解答してください。
- 二 問題用紙は全部で十七ページです。解答用紙は一枚です。
- 三 解答用紙の所定欄に受験番号と氏名を記入してください。
- 四 解答はすべて解答用紙の所定欄に記入してください。
- 五 問題用紙は持ち帰ってください。

□ 次の文章は、本間千枝子『父のいる食卓』の一節である。文章を読んで、後の問に答えよ。なお、文章中の「私」は、父「直都」と母「高枝」の妻子であるが、すでに「高枝」の兄の「忠礼」の養女となっている（設問の都合上、原文の一部を改変している。また、設問に字数制限がある場合、句読点・符号等はすべて字数に含む）。

秋、新そば粉が郷里の松代から届くと、直都は日曜の昼間、そばを打つと行ってだれかれを招き集めた。そうした時の台所は「I」とやらで大さわぎ、高枝とお手伝いの人ははじめに直都と男の子供たちに台所を明け渡すべく彼らの使いそうなものをあらかじめ手近に揃える。それから、「とにかく粉だらけにされて後始末がたまらないから」と、台所全体は言うに及ばず、廊下も女中部屋も、茶の間の半ばまで、新聞紙を敷きつめた。

そうした家中が「II」をつついたような手打ちそばの会だったと思う、私は小さな、まだ口もろくにきけない自分が、ちらくちらと動きまわった記憶がかすかに残っている。兄たち二人は台所で楽しそうな声を立てている。その間にまじって直都の低いガラガラした声が響く。「ばかっ！ そんなことをする奴があるかっ」、「もう少し、もうひとふりメリケン粉を入れて」、「釜の火は火事になったってかまうものか、ゴウセイに燃やすんだ」というような声だけ聞いても大の大人の直都の興奮が①つぶさに伝わってくる。

女たちは台所から締め出され、高枝の姿は何故もなく、私は台所に行かぬよう下の姉に番をされている。しかし私は小犬のように落ち着かない。お兄ちゃんたちが最大規模のままごとで直都に遊ばせて貰っているらしいのに、私は台所に近よることも許されない。おまけにその日は寒くなりかけた季節だったのだろう、姉は高枝にとくに言いつかつて、私に、大嫌いな赤い毛糸で編んだパンツをはかせようとさつきからチャンスをねらっている。

私は小さな頭で熱心に姉を撒く奸計をめぐらし、②すきをねらってねずみのように台所に駆けこんだ。そして泥棒猫のような速さで男たち三人が楽しげにかがみ込んで何かをしていたこね鉢から、粉をつかみとるが早いのか、あつという間に玄関の間に続い

た廊下まで出てきて、小さな手の中の粉をまき散らした。

奥から赤いパンツを持つてとび出してきた姉と、「お母さんに叱られるぞー」といいながら台所から出てきた父と、「あらららら、誰かさんがやっちゃった！」と小さな兄が叫ぶ声、そして折悪しくその時、玄関から帰ってきた高枝とが私の意識の映像にはまず写し出される。そしてその後の私の記憶はややとんでしまい、ピシヤピシヤとお尻をはたかれて III、がむしゃらに無言の高枝から赤いパンツをはかされてしまった感覚が、たしかにお尻のあたりに残っている。高枝は怒り、姉は叱られ、兄は真剣な表情をし、直都は笑っている。

楽しいことは家族全員を巻き添えにし、一人でもそれに対してクールな反応を示す者があれば皮肉を言ったり b プンガイしたり、蔑んだ言葉を投げかけたりして相手を自分のムードにひき入れなくては気がすまぬのが直都だった。日常の些 さい 細 さい な喜びに子供のようには無心にはしやぎ、素速く直線的に気持ちを表現するので、反応の遅く興味の幅のせまかった私は何度となく感激性が鈍いと嘆かれたり、表情のない「金仏さま」などと c アナドられたものだった。

小学生の頃のある「 X の日」、私は遊びの途中で呼ばれたのか、直都の家の茶の間に浮かぬ顔で座っていた。直都は兄たちにあとの仕事はまかせられる段階まできたらしく、台所を離れて食卓についたところだった。自分の総 d シキのもとに出来上がったそばが運ばれてくるのを待ちながら、 IV、かしましく、台所へ掛け声をかけるが如く こ まかい注意を声高に送りながら徳利 d を傾けはじめた。

あとは兄が駆けるようにして台所から運んでくるはずの洗いたてのそばを食べるだけ。

「さあ早く早く、ほらきた。海苔 e をもんで、葱 わ おろし、七色、みんなあるな、あつ ゆ 柚子 す があつたな大いそぎでもいでこい……うむ、これは大 e ケツサク。みんな食べて！ さあ、さあ。あ、そんなにつゆの中にさんぷりと漬ける や 奴 が があるか。ばかつ！ そばの食べ方を知らぬ子がいるとは……」

高枝も兄たちも姉も、そこにいるだれもかれもてんで勝手においしいとか、少し固すぎるとか、たれがうまくできたとか、葱

の刻み方が少々粗いというような言葉を交わし合っている。その中にあって何やら少しばかり元気がない私に気づいた直都は、音をたててそばを食べている最中だったが、いきなり高枝に向かつて言った。

「お母さん、あちらで静かにうちのそばを召し上がっていらっしやる方は、どこのどなた様かな？ あんなままずくなるような召し上がり方をするお人をお招きした覚えはないが……」

「え？ うちの子？ そんな筈はないよ。どちらさまかは知らないが、何かお間違いらしいよ。お通夜にでもいらしたおつもりかな」

高枝が私に言う。

「さあチイちゃん、あれはね、お父さんのおそば、おいしいとかまずいとか言って欲しいってことなのよ。あっちの家に暮らしていると大人だけで静かだから黙ってご飯を食べるようになってしまったんですよ。本当にあの夫婦は子供の心が分からない人たちなんだから、子供には賑やかなのがいちばんなのに……つまらぬ顔で座っているからってこの子のせいじゃありませんよ、かわいそうじゃないの」

「そうか、あの人の家は毎晩お通夜か」

私をめぐる会話は事ある毎にどちらの家の側からも何とはなしに片方を貶す言葉に発展しがちだった。そのたびに私は子供ながら、いわば自分の親たちには何と教養がないのだろう、という思いがするのを禁じ得なかった。要するに直都は自分の子供を義兄にとられたことをいつもどこかで恥じて寂しく思い、忠礼の方は、本当の父子の間の情というものが、あるいは自分と養女の間の実の親に勝るほどの愛情よりも、V していながら目には決して見えぬ深いところで強く空気のように切ることのできぬ絆で結ばれてはいはしないかと、いつも不安だったのである。そして、それだけのこと——私をめぐる微妙な心の存在——について私が悟ったのは意外に年齢が早く、小学校二年生ぐらいの頃だったように思えるが、これをどう扱い、私が父親たちそれぞれをどのように安心させるのかという術は、私は最後まで——父たちの死まで——学ばなかった。

問一 二重傍線部 a ㄱ e のカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄  ㄱ  に入る最も適当な語句を、次のアㄱエの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

I	ア 立入禁止	イ 女人禁制	ウ 貸切専用	エ 不法占拠
II	ア 燕 <small>つばめ</small> の巣	イ 蟻 <small>あり</small> の巣	ウ 雀 <small>すずめ</small> の巣	エ 蜂 <small>はち</small> の巣
III	ア 真偽をたしかめず	イ 可否をとわず	ウ 善悪をみきわめず	エ 有無をいわさず
IV	ア しなやかに	イ もどかしく	ウ うらめしく	エ たおやかに
V	ア 淡々と	イ 悠々と	ウ 隆々と	エ 転々と

問三 空欄  に入る最も適当な語句を、本文中から抜き出し、二字で答えよ。

問四 傍線部①「大の大人の直都の興奮」とあるが、ここから「直都」のどのような性格が分かるか。それが分かる最も適当な部分を本文中から四十字以内で抜き出し、解答欄の「性格」に続くように、最初と最後の五字を答えよ。

問五 傍線部②「すきをねらってねずみのように台所に駆けこんだ」とあるが、「私」はなぜそうしたのか。その理由を本文中の語句を用いて、四十字以内で答えよ。

問六 傍線部③「何やら少しばかり元気のない私」とあるが、「私」がそのように見える理由について、「私」はどのように説明しているか。最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 直都と異なり、私は反応が遅く興味の幅がせまかったから。

イ 直都のそばを、まずくなるような食べ方で食べていたから。

ウ 直都の家と違い、私の家では大人と黙ってご飯を食べるから。

エ 直都に対し、教養がないという思いを禁じ得なかったから。

問七 傍線部④「つまらぬ顔」とあるが、これを比喩的に言い換えた表現を本文中から抜き出し、五字以内で答えよ。

問八 傍線部⑤「私をめぐる微妙な心の存在」とあるが、「直都」と「忠礼」は、それぞれ「私」に対してどのように思っているか。解答欄の「直都は」「忠礼は」の後に続く形で、三十五字以内で答えよ。

問九 本文の内容に合致するものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 子供の食卓は賑やかなのが一番である事が、私の養父母には分からなかった。
- イ 楽しい行事が多かった直都の家族のなかで、幼い頃の私は感激性が鈍かった。
- ウ そばが固すぎるなどの会話も、直都にとっては家族との楽しい時間であった。
- エ 私は、私をめぐる二つの家の会話が、片方を貶してしまうのを避けたかった。
- オ 父親たちの微妙な心の存在を安心させる術を、小学校二年生頃に悟っていた。

㊦ 次の文章は、苦野一徳『はじめての哲学的思考』の一節である。文章を読んで、後の問に答えよ（設問の都合上、原文の一部を改変している。また、設問に字数制限がある場合、句読点・符号等はすべて字数に含む）。

“テツガク”と聞くと、多くの人は、実生活に大して役に立たない、何だかよく分からない難しそうなことを考えているもの、というイメージを持つんじゃないかと思う。

I、「私ってなんだろう？」とか、「時間ってなんだろう？」「愛ってなんだろう？」「言葉ってなんだろう？」「生きる意味ってなんだろう？」とかいったいかにも哲学的な問いは、それだけ聞くとあんまり役に立つ感じはしない。

哲学者と呼ばれる人たちも、そうしたさまざまなことからの「そもそも」を、どこまでも考えずにはいられない人間だ。だからまともに相手をしたら、はつきりいつて面倒くさくて仕方ない。

西洋哲学の父、ソクラテス（紀元前469―399年）は、古代ギリシアのアテナイで、道行く人びとに「ねえ君、君、恋とはいったい何だと思うかね？」などと問いかけて、多くの人を A させていた。

「それは胸のドキドキ」とか「食事もノドを通らなくなる気持ち」とかいおうものなら、ソクラテスは、「そんなものは恋の本質じゃない。単なるシヨウジョウだ<sup>a</sup>」みたいなことをいうものだから、人びとはついには、「はいはい、分かりましたよソクラテスさん。もういい加減にしてください」と、彼のもとを去っていくのだった。

そんなソクラテスに、ある時カリクレスという政治家がこんなことをいった。

「ねえソクラテス、正義とは何かとか、徳とは何かとか、いい年した大人がそんなことばかり考えているのはコツケイだよ<sup>b</sup>。若い時に哲学に熱中するのはまあいいとしても、あなたももうおじさんなんだから、もつと処世術とか、儲け術<sup>もつ</sup>とか、そういう人生の役に立つことを考えたまえ」

ソクラテスの時代から、哲学は役に立たないとバカにする人はたくさんいたのだ。



でも、僕はあえて言いたいと思う。哲学は、僕たちの人生に、ある独特の仕方でも役に立ってくれるものなのだ、と。たとえば、今あげた私、愛、恋、生きる意味……。これらの本質を知ることができたなら、それってちょっとすごいことじゃないだろうか？

ちよつとすごいだけじゃない。本質をとらえること、これは僕たちが物を考える時の、実は一番大事なことなのだ。

たとえば教育について考えてみよう。もしも僕たちが、その本質について十分な共通了解を持っていなければ、教育論議は、それぞれがそれぞれの「教育観」をぶつけ合うだけの、ひどく混乱したものになるだろう。実際、<sup>i</sup>ちまたの教育論議は、「叱るべきか、ほめるべきか」とか、「<sup>c</sup>タイパツはありか、なしか」とかいった対立に満ちている。

その意味でも、哲学が「X 教育とは何か？」と問うことは、とても大事なことなのだ。

もちろん、哲学者じゃなくても「教育とは何か？」と考えることはある。でも、こうした「X」を考えるための「思考法」を、二五〇〇年もの長きにわたってB 磨き上げてきたものこそが、哲学なのだ。だから、僕たちがその思考法を身につけているとしないのでは、思考の深さと強さにおいて圧倒的なへだたりがある。

そんなわけで、哲学とは何かという問いにひとこと<sup>こと</sup>で答えるなら、それはさまざまな物事の「本質」をとらえる営みだということができる。

そんなこと本当にできるの？ そう思う人もいるかもしれない。特に現代は「II 相対主義」の時代。II、世界には絶対に正しいことなんてなく、人それぞれの見方があるだけだという考えが、広く行き渡っている時代だ。

たしかにももちろん、この世に絶対に正しいことなんてない。でもそれは、だからといって、僕たちが何につけても「共通了解」にたどり着けないことを意味するわけじゃない。

僕たちは、お互いに話をつづけていくうちに、「なるほどくそれってたしかに本質的だ」と納得し合えることがある。だから、恋っていったい何なのか、教育って何なのか、といったテーマについても、対話を通して、その「本質」を深く了解し合える可

能性がある。

繰り返すけど、それは「絶対の真理」とは全然ちがう。Ⅲ、できるだけだれもが納得できる本質的な考え方。そうした物事の「本質」を洞察することこそが、哲学の最大の意義なのだ。

相対主義の現代、人びとは——哲学者たちでさえ——「絶対に正しいことなんて何もない」といつて問題を済ませようとする傾向がある。「よい社会って何だろう?」「よい教育って何だろう?」「みたいなむずかしい問いに直面すると、「ま、考え方は人それぞれだよ」で済ませようとする傾向がある。

でも、僕たちの人生にはそれでは済まない時がある。対立を解消したり、協力し合ったりするために、何らかの「共通理解」がどうしても必要になる時がある。

そんな時、哲学は、「ここまでならだれもが納得できるにちがいない」という地点まで考えを深めようとする。Ⅳ すぐれた哲学者たちは、いつの時代も、もうこれ以上は考えられないというところまで思考を追いつめて、それを多くの人びとの納得へと投げかけてきたのだ。

たとえば、今僕たちが暮らしている民主主義社会。そのゲンリユウ<sup>d</sup>は、二百数十年も前の、ジャン・ジャック・ルソー（1712—1788）やG・W・F・ヘーゲル（1770—1831）といった哲学者たちが見出した「よい社会」の「本質」にある。

それまでの時代、人びとはただⅤ 戦争を繰り返してきた。戦争がとりあえず休止するのは、多くの場合、戦いに勝利した者がその地を支配した時だった。つまり人類は、一万年以上にわたって、激しい命の奪い合いか、そうでなければ権力者が支配する時代を生きてきたのだ。

このヒサシな戦争を、どうすればなくすことができるだろうか？ これは哲学者たちが何千年も考えつづけた問いだった。

ヨーロッパでは、十七世紀にトマス・ホッブズ（1588—1679）という哲学者が現れて、戦争をなくしたければ、みんなの合意で最高権力者を作り出し、その人に統治してもらおうほかないと訴えた。

ここで重要なのは、「みんなの合意で」という点だ。ホッブズは、ヨーロッパの絶対王政を理論的に支えた人、と非難まじりにいわれることもあるけど、それはちよつといいすぎだ。ホッブズはホッブズなりに、だれにとつても平和な「よい社会」の本質は何かと考えたのだ。

**V**、ホッブズの思想にはやつぱり大きな問題があった。

たしかに、権力者が社会を統治すればひとまず戦争はなくなる。でも、そうすれば大多数の人民は、ただ支配されるだけの自由のない存在になる。

問一 二重傍線部 a く e のカタカナを漢字に直せ。

問二 傍線部 i 「ちまた」の本文中の意味として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 普通    イ 一般    ウ 世間    エ 町中<sup>まちなか</sup>

問三 傍線部ⅱ「とりあえず」の意味に最も近い語句を、本文中から抜き出し、四字で答えよ。

問四 空欄   に入る最も適切な語句を、次のア～オの中から一つ選び、それぞれ記号で答えよ（但し、同

じ記号は二度以上使えない）。

ア つまり    イ たしかに    ウ とはいえ    エ あくまでも    オ そして

問五 空欄   に入る最も適切な語句を、次のア～エの中から一つ選び、それぞれ記号で答えよ。

<input type="text" value="A"/>	ア	しよんぼり	イ	しんみり	ウ	がつくり	エ	げんなり
<input type="text" value="B"/>	ア	なんとか	イ	細々と	ウ	とことん	エ	延々と
<input type="text" value="C"/>	ア	なんとなく	イ	ひたすら	ウ	思うままに	エ	ぼんやりと

問六 空欄  に入る最も適切な語句を、空欄  より前の文章から、四字で抜き出して答えよ。

問七 傍線部①「その本質について十分な共通理解を持っていなければ」とあるが、本質についての十分な共通理解とはどのようなものか。その説明として最も適当な部分を本文中から二十一字で抜き出し、最初の五字を答えよ。

問八 傍線部②「ひどく混乱したものになるだろう」とあるが、その理由として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 教育論議では、絶対的な真理はないので、議論より実践が大事だから。
- イ 教育論議では、人それぞれの考え方があって、議論がかみ合わないから。
- ウ 教育論議では、深い思考を必要とするので、簡単に結論が出ないから。
- エ 教育論議では、対立的意見に満ちているので、論争に発展しがちだから。

問九 傍線部③「僕たちが何につけても『共通了解』にたどり着けないことを意味するわけじゃない」とあるが、その理由として最も適当な部分を本文中から三十字以内で抜き出し、解答欄の「から」に続くように答えよ。

〔三〕 次の文章は、『更級日記』の一節である。永承元年（一〇四六）、三十九歳となつた作者は、初瀬詣に出かける。大和国（奈良県）初瀬の長谷観音に参詣するのである。文章を読んで、後の間に答えよ。

そのかへる年の十月二十五日、大嘗会の御禊とののしるに、初瀬の精進はじめて、その日京をいづるに、さるべき人々、「一代に一度の見物にて、田舎世界の人だに見るものを、月日多かり、その日しも京をふりいでて行かむも、いともの狂ほしく、流れての物語ともなりぬべきことなり」など、はらからなる人は、言ひ腹立てど、ちごどもの親なる人は、「いかにも、いかにも、心にこそあらめ」とて、言ふに従ひて、いだし立つる心ばへもあはれなり。ともに行く人々も、いとみじくものゆかしげなるは、いとほしけれど、「物見て何にかはせむ。かかるをりに詣でむ心ざしを、さりとておほしなむ。必ず仏の御験を見む」と思ひ立ちて、その暁に京をいづるに、二条の大路をしも、わたりて行くに、さきに御あかし持たせ、ともの人々淨衣姿なるを、そこら、棧敷どもに移るとて、行きちがふ馬も車も、かち人も、「あれはなぞ、あれはなぞ」と、やすからず言ひ驚き、あさみ笑ひ、あざける者どももあり。

良頼の兵衛の督と申しし人の家の前を過ぐれば、それ棧敷へわたりたまふなるべし、かど広う押しあけて、人々立てるが、「あれは物詣で人なめりな。月日しもこそ世に多かれ」と笑ふ中に、いかなる心ある人にか、「一時が目をこやして何にかはせむ。いみじくおぼし立ちて、仏の御徳必ず見たまふべき人にこそあめれ。よしなしかし。物見で、かうこそ思ひ立つべかりけれ」とまめやかに言ふ人、一人ぞある。

(注) 大嘗会の御禊：天皇が即位後初めて収穫された穀物を天地の神々にさし上げる一代一度の大礼が大嘗会で、それを行うにあたり、天皇は、内裏を出て二条大路を通り、賀茂川へ行幸して身をきよめる。そのみそぎの儀式が御禊。

精進：初瀬詣するため、一定期間、身をきよめて不浄を避けること。

浄衣：神事や仏事に参加する者が着る清浄な白衣。

良頼：藤原隆家の長男。

問一 二重傍線部 a 「十月」の異名をひらがなで答え、b 「かち」を漢字に直せ。なお、『更級日記』の前年の記事には「しもつき」の二十余日、石山に参る」とあり、「しもつき」は十一月の異名である。

問二 波線部 A 「ののしる」、B 「ものゆかしげなる」、C 「そこら」の意味として最も適当なものを、次のア～エの中から選び、それぞれ記号で答えよ。

A 「ののしる」

B 「ものゆかしげなる」

C 「そこら」

ア 声高に物と言う

ア 初瀬詣したそうである

ア そのあたり

イ 大声で非難する

イ 物を言いたそうである

イ 大勢

ウ 権勢が盛んである

ウ 気品ある感じである

ウ その程度

エ 世間で大騒ぎする

エ 見物したそうである

エ 非常に

問三 傍線部①「その日しも」とあるが、「しも」が付いていることの説明として最も適当なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えよ。

- ア 大嘗会の御禊は天皇一代に一度の見物だが、田舎にはそんなことと無関係に見るに値する風景がある、と反論している。
- イ 大嘗会の御禊は天皇一代に一度の見物で、田舎の人さえ京までやって来るのに、わざわざそんな日に、と強調している。
- ウ 十月二十五日に京を出る意図が分からず、一年のうちには、もつと落ち着いた適当な日があるはずだ、と指摘している。
- エ 十月二十五日に京を出るのは、寒い季節に入って霜も降りて旅路をたどるのに不都合ではないか、と疑問を述べている。

問四 傍線部②「心にこそあらめ」、③「おぼしなむ」、⑤「よしなしかし」の現代語訳として最も適当なものを、次のア～エの中から選び、それぞれ記号で答えよ。

- ②「心にこそあらめ」
- ア 心中に真実がきつとあろう。
  - イ わたしの判断に従いなさい。
  - ウ あなたの気持ち次第だろう。
  - エ 信仰は深く心に留めなさい。



③ 「おぼしなむ」

- ア 仏様は、きっと殊勝にお思いになるだろう。
- イ 供の者は、必ず快く了解してくれるだろう。
- ウ 兄弟には、是非ともわかってほしいものだ。
- エ 夫には、どうしても理解してほしいものだ。

⑤ 「よしなしかし」

- ア 目のこやしになるなど、根拠がないことだ。
- イ 御禊の日に初瀬詣するなど、無駄なことだ。
- ウ 御利益をあてにするなど、よくないことだ。
- エ 物見に夢中になるなど、つまらないことだ。

問五 傍線部④「月日しもこそ世に多かれ」について、何をする「月日」かが分かるように言葉を補い、現代語訳せよ。

問六 傍線部⑥「思ひ立つべかりけれ」とあるが、「べかり」と「けれ」の文法的意味として最も適当なものを、次のア～カの中から選び、それぞれ記号で答えよ。

- ア 意志    イ 推量    ウ 適当    エ 可能    オ 過去    カ 詠嘆

問七 次の問に答えよ。

i 『更級日記』の作者は誰か。漢字五字で答えよ。

ii 『更級日記』よりも後の時代に書かれた作品はどれか。次のア～オの中から選び、記号で答えよ。

- ア 蜻蛉日記    イ 讃岐典侍日記    ウ 紫式部日記    エ 土佐日記    オ 和泉式部日記